

Living the Lotus 1

Buddhism in Everyday Life

2025
VOL. 232



立正佼成会 オクラホマ教会

Living the Lotus Vol. 232 (January 2025)

【発行】立正佼成会 国際伝道部
〒166-8537
東京都杉並区和田2-7-1 普門メディアセンター3F
Tel: 03-5341-1124 Fax: 03-5341-1224
E-mail: iiving.the.lotus.rk-international@kosei-kai.or.jp
編集責任者: 赤川 恵一
編集チーフ: 三川 紗知
校閲者: 小坂 和正、菊池 克之
編集スタッフ: 国際伝道部スタッフ

立正佼成会は1938年に庭野日敬開祖、長沼妙佼脇祖によって創立された、法華三部経を所依の經典とする在家仏教教団です。家庭や職場、地域社会の中で釈尊の教えを生き、平和な世界を築いていきたいと願う人々の集まりです。現在は庭野日鏡会長とともに、私たち会員は仏教徒として布教伝道に励みながら、宗教界をはじめ各界の人々と手をたずさえ、国内外でさまざまな平和活動に取り組んでいます。

Living the Lotus—Buddhism in Everyday Life (法華経を生きる～生活の中の仏教)というタイトルには、日々の生活のなかに法華経の教えを活かして、泥水に咲く美しい蓮の花のように、人生を豊かに、そしてより価値あるものにしていきたいとの願いが込められています。本誌を通じて、世界中の人々に日々の生活のなかで活かす仏教の教えをお伝えします。

一人ひとりが「オアシス」に

庭野日鑑
立正佼成会会長



正月という名の「始発駅」

新年、おめでとうございます。一年の始まりをこうしてみんなで迎え、すべての人がいっせいに新たなスタートをきる日本の正月は、いわば一年の「始発駅」です。また正月は、前の年の反省をふまえた誓いも新たに、心機一転をはかる格好の機会でもありますから、歌人の^{さいとうもきち}斎藤茂吉が「新しき年のはじめにおもふことひとつ心につとめて行かな」と詠んだように、この始発駅でしっかりと一年にわたる旅の^{したく}支度を整えたいものです。ちなみに、みなさんは何を「心にずっと思いつづけていこう」と誓願されたでしょうか。

私は今年、おかげさまで米寿（数え年で八十八歳）を迎えさせていただき、そのことをたいへんありがたく、喜ばしいことと受けとめています。ただ、いくつになっても成長や向上をめざすのが人間本来のあり方だとすれば、米寿もまた人生の「停車駅」の一つ、通過点であって、この丘を越えたらまたつぎの丘をめざして——と私は思っているのです。その意味では今年もまた、いつでも^{しょうじん}精進と思いやりの心を忘れずに前進・成長していきたくと願っています。

これが、私のいつに変わらぬ「一年の計」ですが、近年とくに心にかかっているのは「人づくり」の大切さです。

宇宙に浮かぶ青き水の惑星・地球の環境が年々悪化し、そこに住む人間たちのあいだではもめごとや戦争が絶えない……。この現実を思うと、私たち一人ひとりが人の痛みのわかる人間性豊かな人を育てることを自らの「計」とする大切さが胸に迫るのです。人の心も環境も、調和のとれた美しい地球を未来に^{のこせきむ}遺す責務が私たちにはあるからです。

心に木を植える

本会の創立百周年に向けて、私は以前「人を植える」ことを大事にしたいとお話ししました。それは、私たち仏教徒の立場でいえば、仏の教えをとおして、自分の幸せだけではなく、家族や地域の人はもちろん、遠い世界の人びとをも幸せにしたい、救われてほしいと願って力を尽くす、思いやりの心をもった人——菩薩を育てるということです。

人を憩わせ安心を与える、いわば「オアシス」のような心を宿す菩薩がいるところは、そこがオアシスになります。そして、そのような人が集まれば地域のサंगा（同信の仲間）というオアシスが生まれ、それが人の心を潤す場として広がることを私は理想として思い描くのです。もちろん、それは本会の発展が目的ではなくて、地球と人類の未来に対する切実な危機感からくる理想にほかなりません。

その昔、釈尊にさえ殺意を抱いた人がいたように、人類誕生以来、自分の思いどおりにしたいという人間の欲が変わることはなく、しかも欲望や暴力は肥大化する一方です。しかし、欲望にきりが無いのと同じように、「理想も無限でなければならぬ」と先人は教えています。理想のないところに進歩はなく、理想を現実のものとする営みが人の生活だということです。そして、その理想実現のスタートラインに立っているのが、私たち一人ひとりなのです。まず自身が、家族のなかの一樹のオアシスとなり、自分の家庭が隣近所のオアシスとなることから、それははじまります。

ところで仏教では、他の命を殺める「殺生」を最大の罪とします。ですから、私たちは人を思いやる行動や言葉かけなど慈悲の実践をとおして日々、命の尊さや自他一体の思いをかみしめさせていただくのです。そうした実践はまた利他にも通じ、人の心に新たなオアシスとなりうる一木一草を植えることにもなります。そのように私たちが多くの人と仲よくし、共々に感謝をもっていまを精いっぱい生きることは、開祖さまが「あとを託す人たちへの供養」と表現した、未来につながる「未来供養」でもあるのです。

（『佼成』2025年1月号）



Spiritual Journey

仏・法・サンガの力を支えに菩薩道を歩む ——教会長のお役をとおして得られた学び

オクラホマ前教会長 クリス・ラドソー

この体験説法は、2024年11月18日に法輪閣で行なわれた「教団幹部会」のなかで、退任を迎える教会長を代表して発表されたものです。

み仏さま、開祖さま、お願いいたします。会長先生、お願いいたします。皆さま、お願いいたします。

本日は立正佼成会の教会長として、経験をとおして学ばせて頂いたことを、皆さまと分かち合う機会を賜わり、誠にありがとうございます。これから、いくつかの私の学びについて、お話をさせて頂きたいと思います。

最初の学びは、「一人の力で出来たことは何もない」ということです。法華経には、ご法に身を捧げ、教えを説き弘める「法師」のもとには、必ず、その努力を支える人々や物事が現れると説かれています。私もこれまで数多くの人々に支えられながら、お役を務めてまいりました。(私はこの気づきを通し、精進の力を信じることができました。)

二つ目の学びは、「仏道を歩む人々の、それぞれのペースを大切にすること」です。メンバーの中には、教えの実践や成長に時間のかかる人もいました。しかし、法華経の「信解品」に説かれる窮子が、仏子の悟りを得るまでに20年の歳月を必要としたように、人にはそれぞれにふさわしい成長のペースがあることを知りました。(この気づきは、私に忍耐と方便の大切さを教えてくれました。)

三つ目の学びは、「教会の会員たちは、私にとって大切な教師である」ということです。会員の皆さんは私の行動を模範にしています。そのため、彼らの生活態度に問題が起きた時は、教会長である私がまず自分自身を見つめ直す必要がありました。(この気づきは、私が様々なことから学びを得られるように、視野を広げてくれました。)

四つ目の学びは、「この人生のなかで、ご法を学び、人に伝えることの有り難さ」を知ったことです。ご法の習学と実践は、生涯を通じて私を導き、支えてくれました。(この気づきのおかげで、深く感謝のできる自分にならせて頂きました。)

あるときメディテーションをしていると、ご本尊像と一人の会員との間に、自分が座っている姿が心に浮かびました。その会員は私に苦しみを打ち明けていました。私は一方の手を伸ばして仏の御手に触れ、もう片方の手で会員の手を



退任教会長を代表し、法輪閣で説法をするクリス・ラドソー前教会長
握りました。その時の私は、仏さまと会員との間の繋ぎ手であり、仏の智慧を、必要としている人に繋ぐ一本のパイプに過ぎませんでした。(この気づきによって、私は自分のエゴの殻を捨てて、教えを説けるようになりました。)

こうした気づきを頂いて、私は新たな気持ちで、それまで以上にご法に取り組みました。そして、会員たちと一緒に歩みを進めていくと、新たな「可能性」が生まれてきました。

私は今までに何度も、仏の力、法の力、そして僧(サンガ)の力を、目の当たりにしました。

「仏の力」の一例として、私がまず思うのは、久遠のご本

Spiritual Journey

仏と立正佼成会が、アメリカの中央に位置し、キリスト教徒が人口の大半を占めるオクラホマという地域、つまり日本の仏教団体にとって、まさにあり得ない場所に教会道場を築いたという事実です。

「法の力」について考えた時、私の心に浮かぶのは、亡くなった母親を50年以上も恨み続けていた、あるオクラホマの会員のことです。母親への恨みから、彼女は一度も母親の墓参りをしたことがなく、墓地には墓石さえ置かれていませんでした。しかし、ご法の実践を始めた彼女は、母親の墓を探して、母親にふさわしい墓標を建ててあげたいと思うようになったのです。彼女の母親はアルコール依存症だったため、幼い彼女は母親の世話を追われ、不幸な幼少期を過ごしていました。しかも、悲しいことに、彼女がまだ幼い頃、母親は交通事故で命を落としてしまったのです。通勤途中に車ごと橋から転落したことから、家族の誰もが母親の死は自殺だと思いました。

母親のお墓を見つけるために彼女が墓地を訪れると、墓地の管理人が当時の状況を覚えていて、母親の事故に関する警察の報告書を見せてくれました。そこには、母親の車が橋に差し掛かった時、彼女は逆走してきた対向車に気づき、正面衝突を避けようとして急ハンドルを切ったため、車が橋から転落したことが書かれていました。彼女の母親は自殺したのではなく、逆走車との正面衝突を避けようとして事故に遭ったこと、その結果対向車の運転手の命を救ったことが分かったのです。この事実を知ったことで、彼女の母親を見る目は大きく変わりました。そして、50年以上ものあいだ抱えていた悲しみも少し癒されました。こうした気づきは、立正佼成会をとおして出会えたご法と、先祖供養の実践なくしては、決して得られないものでした。



オクラホマ教会のサンガの仲間と



オクラホマ教会初代教会長のヒルデブランド靖子さんと

「僧(サンガ)の力」について考えるとき、亡くなったお兄さまの法要の席で、自らご供養の導師を願い出た会員のことが思い出されます。ご供養が始まって間もなく、彼女は感情を抑えきれずに泣き出してしまい、導師を続けられなくなりました。すると、別の会員が自然に導師のお役を引き継ぎ、彼女の気持ちが落ち着いて再び導師ができるようになるまで、そのまま導師を続けたのです。

こうした経験のすべてが私の宝物になりました。私はいま感謝の気持ちでいっぱいです。

こうした宝物は、立正佼成会の寛大さと優しさが、私に与えてくれたものです。開祖さま、脇祖さま、会長先生、光祥さま、誠にありがとうございます。

何年も前のことですが、日本を旅行した際に数か所、伝統的な日本庭園を訪れる機会がありました。どの庭園にも独特の美しさがあり、それぞれ深い思想に基づいて入念に作庭され、しっかりと維持管理がされていることが分かりました。ある庭園には、庭の設計の一部として大きな池が作られていました。そして庭を訪れた人が池の向こう岸に渡り、庭園を新しい角度から眺められるように、「敷き石」が置かれていました。

それから何年か経って、私は敷き石と仏道修行には類似性があることに気づきました。菩薩道を歩む私のために、私を教導いてくださった諸先輩が、私のために「敷き石」を置いてくださっていたことに気づいたのです。私が必要と

Spiritual Journey

する時、彼らはそっと私の背中を押して、何を実践し、何を読み、何を話し、どう教えを伝えればよいか、教えてくださいました。次のステップに進むことを、少し怖いと感じた時もありましたが、先輩の皆さんも同じように、さらにその先輩に教え導かれてきたことを知り、私は彼らに全幅の信頼を置くことができました。

リーダーのお役を頂き、しばらくして気づいたのは、私を育ててくださった諸先輩の指導のスタイルを、私も引き継いでいることでした。それは何かといえば、会員の一人一人に細やかな目配りをし、それぞれの能力、実践力、精進の深さの把握に努め、彼らが習学と実践をとおして成長を続けられるように、一人一人に踏み石の場所を示しながら、最も効率的な方法を考えることでした。

私が今日ここにあるのは、多くの諸先輩のおかげさまです。オクラホマでは、ヒルデブランド靖子元教会長さんと共に、教会の発展のために尽力する素晴らしい機会を頂きました。彼女は素晴らしい指導者でした。これまで多くの人々が、私たちの共同作業を「相乗効果」という言葉で評価してくださいました。靖子教会長さんと一緒に過ごした日々が、私を成長させてくれました。教会施設の運営について、ある時は私のアメリカ式の方法を信頼して下さり、またある時は、私の考え方が周囲に及ぼす影響についてよく考えるようにと、優しく諭してくださいました。必要な時はいつでも、「より広い視野」を示して下さる彼女を、私は常に信頼していました。本当にありがとうございました。

日本では、「元気ですか？」と聞かれた時、「おかげさまで、元気です」と答えることを知りました。これは周りの人々や自然とのつながりに対する深い理解を、みごとに表現した言葉だと思います。私はこれまでの人生で、たくさんの贈り物を頂きました。今日はその贈り物への感謝を表す日でもあります。過去の出来事を振り返って感謝するのはとても簡単です。しかし、心を静かに集中すれば、今のこの一瞬にも、感謝の心を持つことができます。なぜなら、一瞬一瞬に生ずる「いのち」の贈りものに気づく心の眼があれば、感謝は自然に生まれてくるものだからです。それは本当に喜びに溢れた体験です。

オクラホマ教会にクリス・ピーターズ新教会長をお迎えし、私の心は安らぎと充足感に満たされています。彼は智慧と情熱を兼ね備えたリーダーです。彼が、この教えの大道を、心ゆくまで歩み続けて行かれることを、念じてやみません。

立正佼成会の「世界サンガ」のために、リーダーの一人としてお役を果たせたことは、私にとってたいへん大きな名誉です。長年にわたり私を応援して下さった皆さまに、心より感謝申し上げます。この感謝の気持ちを胸に、これからもご法の道を歩んでまいります。

み仏さま、開祖さま、ありがとうございます。会長先生、ありがとうございます。皆さま、ありがとうございます。



昨年12月7日に行なわれた教会長の就退任式で、クリス・ピーターズ新教会長の就任を祝うラドソー前教会長

まんが立正佼成会入門

教団の行事

開祖さま入寂会

10月4日は開祖さま入寂会が行なわれる日です。

1999年（平成11年）10月4日、満92歳で入寂した開祖さまに追慕、讃歎、報恩感謝の心をささげ、み教えを継承し、その実践を誓願する式典です。

開祖さまは立正佼成会を創立して以来、法華経

の教えを世に広めて人びとを救うとともに、宗教間の対話による世界平和の実現を願って精力的に活動してきました。そこには、拝み合い認め合い、分かち合い、協力し合うという「一乗の精神」がこめられています。



● 豆知識

1979年（昭和54年）、開祖さまはテンプレトン賞を受賞した。1973年（昭和48年）に創設されたこの賞は、宗教の発展につくした人を表彰するもので、「宗教界のノーベル賞」といわれている。

※私的使用を除き、無断で複製・転載をしないでください。

まんが立正佼成会入門



お会式・一乗まつり

勇ましいマトイを先頭に、笛、鉦、太鼓がリズムをかなで、大空いっぱい万灯の花が舞い広がる。

「お会式」は、一般的に日蓮聖人の亡くなった日(10月13日)に行なう法要と万灯行進を指します。立正佼成会では、法華経を広めた日蓮聖人と、立

正佼成会を創立して、世界平和のために生涯をささげた開祖さまのお徳をしのび、「報恩感謝・異体同心・広宣流布」の決意を新たにするため、毎年10月の第一日曜日を「お会式・一乗まつり」と定め、本部・大聖堂を中心に一乗行進を行なっています。



豆知識

日蓮聖人は現在の千葉県に生まれた鎌倉時代の僧。16歳で出家し、さまざまな宗派の教えを学びながら鎌倉や比叡山で修行をつんだ。『立正安国論』などを著し、法華経の教えを広めることに生涯をささげた方だ。



世界を大きなサンガとしよう

サンガは仏道のすべて

立正佼成会開祖 庭野日敬



常随の弟子・阿難が、サンガについていろいろと考えた末に、お釈迦さまに、「善い友・善い同信者をもつことは、仏道の半ばにも当たると思いますが、いかがでしょうか」とお尋ねしたことがあります。そのときお釈迦さまは、「いや、半ばではない。善き仲間とともにあることは、仏道のすべてである」と、お答えになっています。

仏教徒としての基本的条件として「三宝歸依」があります。仏に歸依し、法に歸依し、僧に歸依するのが、釈尊教団の一員としての必須条件でした。このうち、仏さまに歸依し、法（教え）に歸依することは常に念頭にあっても、僧（僧伽＝信仰者の結合体・サンガ）に歸依する思いは、ともすれば薄れがちではないでしょうか。

お釈迦さまのお言葉の「すべてである」というのは、「それによって完成する」「それがなければ成就しない」という意味に解釈すべきであると私は思います。

というのは、私たちが一人でポツンと孤立して信仰しているときは、つい怠け心を起こしたり、疑惑を生じたり、生活上のさまざまな欲望に負けたりしがちです。そのようなとき、同信の仲間がいて、あるいは励まし、あるいは諫め、あるいは考え方の方向を示してくれたらすれば、そういった危機を乗り切ることができます。

また、危機の回避だけではありません。私たちがあきらみかけた信仰体験を得たとき、その喜びを語る相手もいて、相手とともに「法」の確かさを証し合うことがどれほど楽しいことか。それがどれぐらい、お互いの信仰を深めうることか。これがまた大切なことなのです。

法華經にも、そうした証明し合うことの大切さが説かれています。お釈迦さまが「法」をお説きになっただけでは、法華經は完成したわけではないのです。「見宝塔品」で多宝如来が出現されて、お釈迦さまが説かれた「法」を、宝塔のなかから「善哉、善哉。釈迦牟尼仏の説く法は眞実である」と証明されたときに、初めて完成したのです。お釈迦さまと多宝如来の二如来が宝塔のなかに並んで座られたお姿こそが、その完成の象徴なのです。

ですから、立正佼成会の会員が、法座で体験を話し、「法」のありがたさを証明し合うことは、法華經の教相から見ても不可欠の重要事なのです。

Director's Column

サンガの温もりを大切に一年に

国際伝道部長

赤川 恵一

明けましておめでとうございます。本年が皆さまにとって素晴らしい一年となりますよう、心よりお祈り申し上げます。

昨年、日本では元日に能登半島地震が発生し、気持ちが重くなる年始めとなりました。一年が経過した今も震災の傷跡が癒えない状況に胸が痛みます。また、国連事務総長による「地球温暖化の時代は終わり、地球沸騰化の時代が到来した」との発言にあるように、海水温の上昇により世界中で異常気象に起因する自然災害が頻発した一年でした。また猛暑により多くの方が命を落とすという痛ましいニュースも目にしました。

今年こそ、人類が苦しみや悲しみの中から得た叡智を結集し、自然と人間が調和した寂光土の建設に向け、少しでも歩みを進められる年になることを願ってやみません。

先日、アルコール依存症対策に取り組んでいる団体の方から素晴らしい言葉を教えていただきました。「アディクション（中毒）の対語はコネクション（つながり）である」というものです。私たち仏教徒の言葉に置き換えれば、「執着はサンガの温かいご縁の中でこそ離れられるもの」と言えるでしょう。会長先生が今月のご法話で教えてくださっているように、明るく優しく温かい人間関係が生み出す場、いわゆる「オアシス」のようなサンガの力こそが諸課題に応えるエネルギーになることを信じて、三宝帰依に徹する2025年のスタートを切ってまいりたいと思います。



2024年11月13日、本部行事に参加した海外の教会長さんと(法輪閣、前列中央:赤川部長)



一食を捧げる運動

Donate-a-Meal Movement

立正佼成会の「一食を捧げる運動」は今年で50周年を迎えます。本年は隔月で、この運動についてご紹介します。

こころがよろこぶ。



「一食を捧げる運動」の日本語ウェブサイト。精神、概要、支援している団体からの情報、現地の声、ボランティア活動の様子など、さまざまな情報を掲載しております。

「一食を捧げる運動」とは

「一食を捧げる運動」とは、世界各地で起きている紛争や災害、貧困などで苦しむ人々に思いをはせ、食事や趣味に使う自分にとって必要なお金から献金し支援活動に役立つ、わかちあいの運動です。

もしあなたが、今日たべるものに困らない、家族と語り合える、安心して暮らせる家がある、そんな幸せをおもちであれば、その幸せを持たないひとたちとわかちあってもらいたいと願っています。そしてわかちあうよろこびを感じていただきたいのです。

「こころがよろこぶ一食」をテーマに

一食運動の実践によって感じる、誰かを思い行動できた時のうれしさやよろこびに焦点を当て、自分の中にやさしさや思いやりが育まれる実感を大切にします。

「食事を抜く」ことを基本として実践しつつ、より自分らしい実践のあり方を考えてみることを提案します。

例えば、食事に限らず自分の趣味や嗜好品にかかるお金を、ちょっとガマンして献金してみてもいいですし、自分にいいことがあったとき、幸せのおすそ分けとして献金するやり方もあります。自分のこころがよろこぶ実践にそれぞれが取り組む、多様な実践のあり方を実現したいと考えます。



アフリカ・マラウイの学校給食事業

毎日、おいしいコーンや大豆のお粥を食べています！給食支援が始まる前は、お腹が空いて授業に集中できませんでしたが、給食があると勉強もがんばれるし、学校に行くことが楽しみになりました。これからも休まず学校に行き、勉強をがんばります。
ベンソン（13歳）

一食を捧げる運動 三つの精神



食事や趣味を節して献金することで、貧困や紛争下の人々の苦しみをわがこととします。

苦境にいる人々の平和を祈ります。また、自分自身のいのちを見つめ、平和な社会を創りたいという願いを高めます。

苦しい状況にある人々の支援のために献金します。また、貪りの心をふり返り、少欲知足の心を深めます。

一食実践をする際には「祈りのことば」を唱和し、黙とうを捧げましょう。

祈りのことば

世界が平和になりますように
人のことを思いやる人がふえますように
まず私からやさしくなります（黙とう）

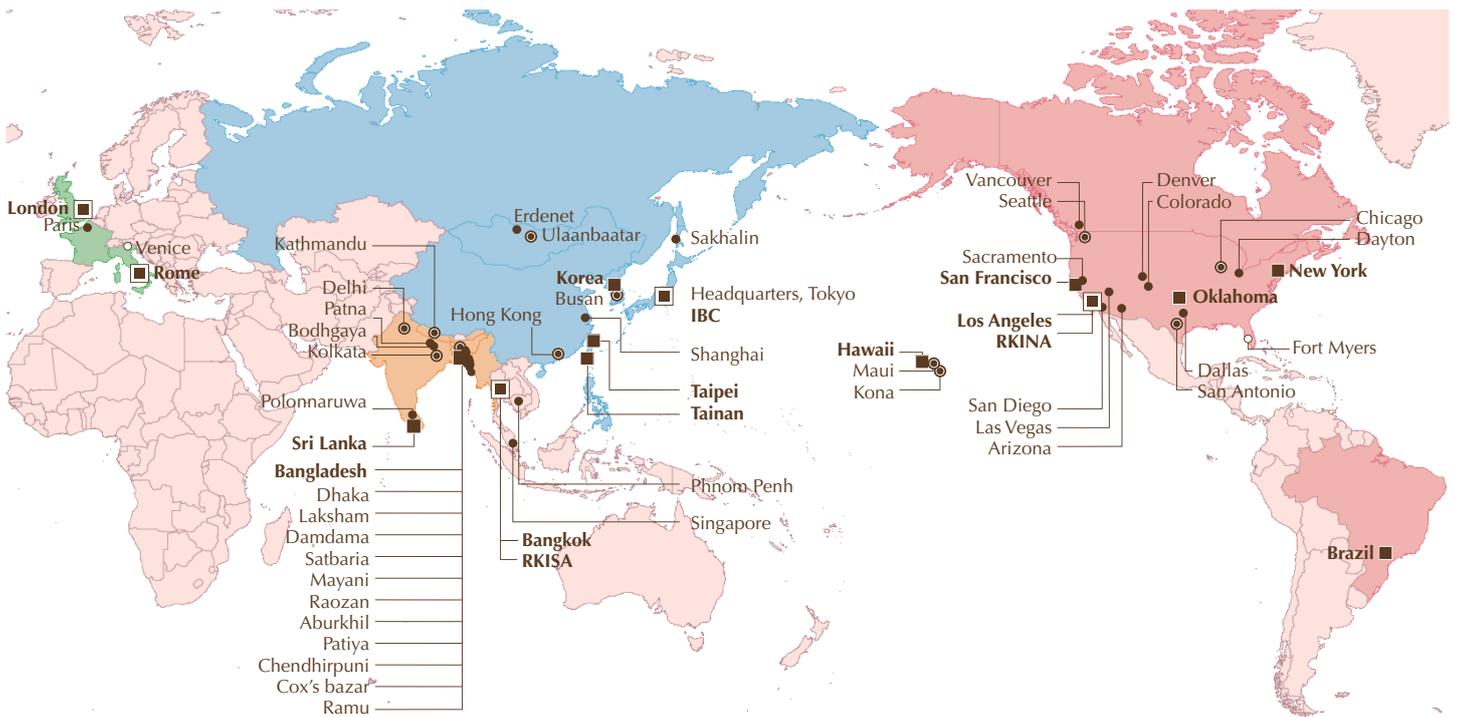


©WFP/Par Tim

国連WFPの学校給食支援で、栄養強化ビスケットを受け取った子どもたち(ミャンマー)



🌸 *A Global Buddhist Movement* 🌸



Information about
local Dharma centers



facebook



X

